

# 日本研究と日本語教育の連携 カナダの大学における日本研究の媒介言語についての 考察

大江都  
マウント・アリソン大学  
カナダ日本語教育振興会会長

## 【要 旨】

「日本研究と日本語教育の連携」という、たいへん大きな課題の手がかりをつかむため、本小論文では、カナダの大学で提供されている日本研究講座において、日本語がどのように関わっているかについて考察した。いうまでもなく、日本研究のある大学には日本語講座があり、また日本研究を専攻するためには日本語の学習が必須である。つまり日本語教育あらずして、日本研究はありえないのであるが、しかし、だからといって、日本研究の媒介言語が日本語であるとは限らないようである。なぜなのか。教える側の日本語能力の有無といったことの以前に、学術研究としての日本研究の背景に理由があるようである。本小論文では、日本研究を含めた東アジア研究学部を有する大学に焦点を当て、その実態について調査し、考察した。

## 1. はじめに

「日本研究と日本語教育の連携」は、簡単には取り組めない膨大な課題である。そこで、本小論文ではその糸口として、カナダの大学における日本研究に焦点を当て、大学で提供されている日本研究講座で、日本語がどのように関与しているかを調査し、考察した。筆者自身はカナダの大学で日本語講座を担当し、日本研究には携わっていない。日本研究の分野外にいる筆者が、日本研究について論じるというのはまことに僭越ではあるが、しかし、本題の調査、考察をすることによって、日本語教育にも何らかの有効な示唆が得られると考えた。

調査、資料の収集には、限られた時間の中で最善を尽くしたが、正確に把握できていない部分、また論点の誤りなど、問題は多々あると思う。それらについては、来るパネル・ディスカッションにおいて、パネル、フロア両方からのご意見を伺えれば幸いである。

## 2. 調査の背景

### 2.1 カナダの日本語教育と日本研究の背景

調査の詳細を記述する前に、まず、カナダの日本語教育と日本研究の背景について以下に述べたい。

カナダにおける日本語教育は、第二次世界大戦と前後して、西海岸のバンクーバーに始まった。戦後、二国の関係が好転し強まっていく中で、日本語教育は徐々に全国へと広がり、また1960年代の始めには、日本研究もそれに続き、ブリティッシュ・コロンビア大学、トロント大学を緒に、いくつかの大学で日本文学、日本史などの日本研究講座が開設されるようになった。1970年代には、カナダと日本の関係はさらに深まり、その象徴のひとつである「田中ファン」が1974年に設立されたのと相まって、日本語教育、日本研究はともに本格的な発展を始めることになる。

現在、カナダにおける日本語学習者の総数は、初等、中等、高等教育すべてを含めて約23,000人、高等教育のみでは約8,500人である。学習者総数では、圧倒的な数を誇る韓国、中国、オーストラリアなどには及びもつかないが、しかし、高等教育の範囲では、世界の上位10カ国に入っている。カナダにとって、日本は第3位の貿易相手国であり、産業・経済・文化面での日本への関心が強いことは言うまでもなく、日本語教育、日本研究の発展にもそれが強く反映されているといえる。

さて、カナダには、現在公的に学位授与を認可された高等教育機関、すなわち大学が全国で約95校あり、そのうち約30校が何らかの日本語講座を提供している。さらにその中の規模の大きい約10大学では、日本研究を含む東アジア研究（またはアジア太平洋研究）の学部があり、日本語講座もその中に組み込まれている。他方、東アジア研究学部を持たない規模の小さい大学では、日本語講座は他の国際言語と並んで言語学部に組み込まれ、独立した言語講座として設定されていることが多い。

本小論では、こうした背景を持つカナダの大学のうち、特に、東アジア研究学部のある大学を調査の対象とした。

### 2.2 日本研究における媒介言語

日本研究の講座を提供する大学には、いうまでもなく日本語講座があり、また日本研究を専攻するためには日本語を学習することが必須である。つまり日本語教育あらずして、日本研究はありえないのであるが、しかし、だからといって、日本研究に日本語が媒介言語として使われているか、というと必ずしもそうではないらしい。

科目内容を目標言語を媒介にして学ぶ、というコンテンツベースの学習が多大の効果を持つことは種々の分野で提唱されている。実際に、英仏の二言語を公用語とするカナダでは、1960年代に英語を母語とする児童・生徒を対象にしたフレンチ・イマージョンが始められ、現在では、初等・中等の公立学校で広く実施されている。算数も理科も社会もすべて目標言語のフランス語を使って教えるプログラムである。また大学においても、ヨーロッパ研究に関しては専門授業も目標言語で教授されることは珍しくない。しかしながら、そうした背景を持つカナダではあるが、日本研究に関しては事情が異なるようである。日本研究ではなく日本語教育の領域では、大半の大学が上級レベルに「読解クラス」またはセミナーを設け、小説、戯曲、詩、定期刊行物、新聞など、生の日本語教材を使って、内容、言語を同時に習得する授業が行われている。つまり、日本語講座上級に限っては、コンテンツベースの方法が適用されているといえる。しかし、他方の日本研究の領域においては、日本語を媒介言語に授業が行われるということは希少のようである。

本小論では、日本研究講座の媒介言語は何であるか、日本語はどのぐらい使われているか、使われていないか、ということについての実態を調査し、考察した。

### 3. 調査対象と調査内容・方法

#### 3.1 調査対象

すでに述べたとおり、カナダには、日本研究を含む東アジア研究学部を持つ大学が約10校あるが、本小論では、そのうち、以下の7大学を調査の対象とした。ただし調査の結果は、大学毎ではなく、7大学を総合したものを示した。これら7大学のうち、東アジア研究でBAのみを授与するのは2校、BAおよびMAを授与するのは2校、BA、MAおよびPhDを授与するのは3校である。

ビクトリア大学	University of Victoria
ブリティッシュ・コロンビア大学	University of British Columbia
カルガリー大学	University of Calgary
アルバータ大学	University of Alberta
トロント大学	University of Toronto
ヨーク大学	York University
マギル大学	McGill University

### 3.2 調査内容・方法

調査内容は以下のとおりである。

- 1) 東アジア研究学部内で提供されている日本研究講座、および他の学部で提供され、東アジア研究学部でクロス・リストされている日本研究講座の科目名と講座のタイトル
- 2) 上記の講座のインストラクションに使われている言語
- 3) 使用テキストの言語
- 4) 担当する教員の背景、日本語能力の背景

資料の収集は以下の情報源をもとに行った。

- 1) 調査対象の各大学のWebサイトおよび教員のWebサイト
- 2) The Association of Universities and Colleges of Canada (AUCC)  
[http://www.aucc.ca/about\\_us/index\\_e.html](http://www.aucc.ca/about_us/index_e.html)
- 3) 『海外の日本語教育の現状＝日本語教育機関調査 2006年＝概要』  
<http://www.jpfc.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html>
- 4) 上記に加え、補足のために一部の教員に電子メールでのインタビューを行った。

## 4. 調査結果

### 4.1 日本研究講座の科目名と講座タイトルの具体例

表1、表2に、カナダの大学における日本研究の概要がわかるよう、東アジア研究学部で提供されている日本研究講座、および他の学部で提供されクロス・リストされている日本研究講座の科目名、具体的な講座タイトルを一覧にした。

- 学部学生対象の講座のみでなく、MA、PhDコースの講座も含めた。
- 内容の近い講座はひとつにまとめた。
- 社会科学系の経済、政治、国際関係学、地理などの分野では、日本も含めた東アジア全体を主題にした講座が多くある。しかし、以下のリストにはそれらを含めず、日本研究のみに限った。

表1 人文科学 Humanities における日本研究講座

科目名	講座タイトルの具体例
近代・現代文学 Modern and Contemporary Literature	「近代日本文学—川端、谷崎、三島」 「日本のフィクションと国家」 「近代フィクションの談話ストラテジー: 夏目漱石、森鷗外、谷崎潤一郎、井 伏鱒二」 「近代日本文学におけるシティ、ボディ、テキスト」 「Japan as seen by?: Reference, Apparatus, Operation」 「日本文学の批評」 「日本文学—詩歌、俳句・和歌」 「大衆文化と戦後の日本-消費小説と周辺作家」 「Inventing Modern Japanese Novel」
古典文学 古典日本語 Classical Japanese	「中世以前の文学—『源氏物語』を主体に」 「古典日本語」
女性文学 Women's Writing	「女性のセルフ・ライティング(日記、自伝、私小説)」
言語学 Linguistics	「日本語学—シンタックスと意味論」
歴史 History	「近代日本」 「近代日本と植民地主義」 「日の上る国—1868年までの日本」 「王朝を求めて—近代から現在」 「日本帝国」 「日本の帝国主義」 「江戸・大阪: 近代日本の都市生活」 「サムライ文化」 「日本のモンスターの歴史」 「日本のセクシュアリティの歴史」
宗教学 Religious Studies	「日本の宗教—神道、仏教、修験道、儒教、新教、民間伝承」 「日本の伝統の中の宗教」
女性研究 ジェンダー研究 Women's Studies, Gender Studies	「フェミニズムと日本」

<p>美術 Fine Arts</p>	<p>「日本の美術と建築」  「日本と韓国の美術」  「中世日本の美学と政策」  「日本文学とビジュアル・アート(絵画、版画、マンガ、書道)」  「中世・近世の書道・絵画・蒔絵」</p>
<p>映画学 Film Studies</p>	<p>「日本ナショナル・シネマ」  「日本の映画とモダニティにおける問題」  「戦前戦後の日本映画におけるヒューマニズム  －黒澤明、溝口健二、小津安二郎」  「日本映画のトレンド  －勅使河原宏、大島渚、伊丹十三、宮崎淳、篠田正造」</p>
<p>演劇 Theatre, Drama</p>	<p>「歌舞伎、文楽、二十世紀以降の演劇」  「日本の演劇史」  「演劇とドラマ」</p>
<p>音楽 Music</p>	<p>「日本の伝統音楽」</p>
<p>文化論 Cultural Studies</p>	<p>「日本のポップ・カルチャー」  「日本のアニメーション文化」  「日本文化におけるサムライ」  「ポップ・カルチャー東と西」  「日本のメディア」  「日本文化・文学・映画」  「アジアの日本」  「現代日本文学・映画・コミック」  「日本文化と日本社会」  「近代日本の文化と社会」  「日本の言語と文化」  「日本文化の愛と性」  「日中の文化関係」</p>

**表2 社会科学 Social Science における日本研究講座**

科目名	講座タイトルの具体例
経済学 Economics	「近代日本の経済発展」 「ストラテジーとマネジメント: 日本とのビジネス」 「日本のビジネス文化」 「近代日本の資本主義」
政治学 Political Science	「日本の政府と政治」 「現代日本の政治的問題」 「近代日本の政治」
国際関係学 International Relations	「東アジア・日本」 「近代の日韓関係」 「日中関係」 「日中の政治」
地理学 Geography	「日本の歴史地理」
法律 Law	「日本の法律」

#### 4.2 媒介言語と使用テキスト

上記にあげた日本研究講座において、インストラクション、ディスカッションに使われている言語は何であるか、また使用テキストの言語は何であるかについて、以下に概要をまとめた。

##### 人文科学—学部生対象の講座

- 1) 1,2年目の学生を対象にした「近代、現代文学」の科目では、大半の講座が、英語を基本的インストラクションの言語とし、英訳のテキストを使用している。講座タイトルに例えば「日本の詩歌、俳句、和歌—英訳」のように英訳書を使うことを明記する講座も多くある。3年目以降の講座

では、前提科目として日本語が含まれ、日本語のテキストが使われているケースが少数あった。

- 2) 日本語学については、日本語を前提科目にする講座が多いが、しかし、それらの講座も含め、大半が英語を基本的なインストラクションの言語とし、テキストも英語の文献である。
- 3) 古典文学の講座では、半数以上が英訳のテキストを使い、インストラクションも英語である。一方、古典日本語の場合は、古典文法を教えることが主体である故、ほぼすべての講座が日本語上級を前提科目としている。
- 4) 上記以外の人文科学系の科目—歴史、宗教学、女性・ジェンダー研究、美術、映画学、演劇、音楽、文化論—では、ほぼすべて、基本的なインストラクションは英語であり、英語の文献を使用している。しかし、固有名詞（人名、地名など）は言うまでもないが、講義の内容においてキイ・ワード、キイ・コンセプトとなる用語については、日本語が紹介されている。但しローマ字書きである。（例えば、歴史の「参勤交代」地理の「城下町」、文化論の「オタク」「ケータイ」など限りなくある。）

#### 人文科学—MA、PhDプログラムの講座

- 5) 多くの大学では、MAコースで日本研究を専攻するためには、上級レベルの日本語能力、特にリサーチに必要な読解力を前提条件とし、さらにPhDコースでは日本語の十分な運用能力を入学条件としている。
- 6) 上記のとおり、日本語能力が前提条件とはなっているが、近代・現代文学、古典文学、言語学の講座においても、インストラクションは英語、テキストは英訳、部分的に日本語の原典を取り入れる、というパターンが典型的のようである。ただし、個々の学生の研究レベルでは日本語の文献も多数取り上げられるようである。
- 7) 他の人文科学系の講座—歴史、宗教学、女性・ジェンダー研究、美術、映画学、演劇、音楽、文化論—に関しては学部レベルとほぼ同様、媒介

言語は英語、使用文献も英語である場合が多い。学生が参加するセミナーでの媒介言語も英語の場合が多い。

#### 社会科学一学部およびMA、PhDプログラムの講座

- 8) 社会科学系の科目—経済、政治学、国際関係学、地理、法律—は東アジア研究学部内で提供されているのではなく、他学部で提供され、東アジア研究学部とのクロス・リストになっている場合が多い。したがって、学部レベル、大学院いずれの場合も受講する学生の背景は多様で、必ずしも東アジア研究を専攻としていない。日本語能力に関してもさまざまである。
- 9) したがって、大半の講座は、基本的なインストラクションは英語、リーディング・リストも英語の文献というパターンである。
- 10) ただし、人文科学同様、大学院レベルでは、個々の学生が研究課題の中で、日本語の文献を使用することは多くある。

#### 4.3 教員の背景

- 1) 人文科学系の日本研究を専門とする教授は、日本語ネイティブであるか、またはノン・ネイティブであっても高度の日本語能力を持ち、業績に日本語での論文、日英の翻訳書が含む、という背景を持つ教授が多い。学部内のネイティブとノン・ネイティブの比率は大学によってさまざまである。いずれにしても日本語での講義が不可能ではないと推測されるが、しかし大学院時代のTAといった類を除けば日本語教育の経験を持つ教授は希少である。
- 2) 社会科学系の日本研究を専門とする教授には、日本語ネイティブの比率は人文科学系より少ない。またノン・ネイティブの教授のうち、業績に日本語での論文、日英の翻訳書が含まれている比率も少ない。

## 5. 結果の考察

### 5.1 日本語が媒介言語とはならない理由

結果の記述のとおり、社会科学系のみならず、文学、言語学が含まれる人文科学系の科目においても、日本語のインストラクション、日本語のテキストが適応されることは非常に少ないことがわかった。学部生を対象にした講座の場合は特にそれが顕著であり、またMA、PhDのプログラムにおいても、個々の学生の研究レベルでの使用言語、文献の出典は別として、授業、セミナーではやはり使用言語は英語であり、リーディング・リストの多くは英語の文献である。

「はじめに」でも述べたとおり、大学の組織構造から見ても、日本語教育あらずして日本研究はありえないのであるが、しかし、日本語は必ずしも日本研究の媒介言語とはなっていないようである。

日本研究で日本語を使わない —— これは、どういう理由によるのであろうか。完全なコンテンツ・ベースとまでは行かなくとも、日本語を媒介言語として授業を行うためには、まず、教える側に高度な日本語能力がなくてはならない。しかし日本研究の教授には必ずしもそれは要求されていない。「教員の背景」で述べたとおり、ノン・ネイティブであっても業績に日本語の論文、日英の翻訳書が含まれている場合があるが、日本研究を専門とする誰もがそのような背景を持つわけではない。また一方、日本語を媒介言語とするためには、教わる側にも均一な日本語能力が要求されるが、一定の日本語能力を満たす学生のみを授業に受け入れる、という体制を定めるのは、学部のレベルでは一部の科目を除き難しい。結果として、多くの場合、日本語を媒介言語にすることは現実的に不可能なのである。

しかしそれでは、もし実現できる条件がそろえば日本語を媒介言語に選ぶのであろうか。多くの教授が、できる限り日本語のテキストも取り入れたいと希望するが、しかし、研究、教授の媒介言語を日本語に移すということは決して目指していないようである。英語基盤を選ぶ理由が、日本語能力の問題以前にあるのではないかと思われる。

文学を教える日本語ネイティブ、およびネイティブに近い日本語能力を持つ教授の意見を聞いた。共通に述べたことを要約すれば、日本語の運用能力を十分に持つ学生がクラスにいたら、クラス発表のために英訳テキストに加えて日本語の原典を読ませるといった課題を与えることはある。しかし、発表の言語は英語であり、その他、提出書面、論文はすべて英語で書かせる、とのことであった。すなわち、たとえ条件がそろって日本語を媒介言語にすることが可能であっても、依然、英語が基本的な媒介言語として選択される、ということである。文学の講座ですらそうであるから、社会科学系の講座では、それがもっと徹底

している。例外的なケースもあるが、これがカナダにおける日本研究の一般的な傾向であるようだ。

なぜなのだろうか。おそらく、北米において学術研究として成り立つためには、日本研究といえども共通の言語である英語を媒介にして、共通の基準に則って研究され、教授されなければならない——という規範があるからなのではないだろうか。だから、文学においても資料として日本語の原典を取り入れるが、しかし基本的には英語で論ずる、ということになるのであろう。

「日本研究の現在—共同作業としての日本研究」の中で富山一郎氏（2009）は、日本研究の系譜には二つあると述べている。一つは、日本史、日本文学の流れを汲み、戦後の日本に形成されたもの。他の一つは、米国で第二次大戦末期に始まった地域研究（Area Studies）の一部として発祥し、「他者の歴史や文化を描き出すもの」として形成されたもの。そして、これから展開する日本研究の一つの方向として、これまでの自国の国民史でもなく地域研究でもない「全ての地域に当てはまる普遍的な理論体系をめざすことになるだろう」と述べている。富山氏は、米国に発祥する日本研究がそのまま普遍的研究なのではない、ということを示唆しているが、しかし、国民史、国民文学という枠から出て、北米の基盤に載せるということは、普遍性に一步近づく、ということになるのではなからうか。そして、これがまさに、カナダの大学における日本研究が目指そうとしていることなのではないだろうか。

話を日本研究と媒介言語にもどそう。英語を媒介言語として日本研究を行う——大学での学術研究という視点から離れても、これには多大な意義があるであろう。日本語のみで理解されるのではなく、他の言語によってより客観的な意味を与えられるということは決して悪いことではない。日本人にとってすら（というよりも日本人であるがため）、日本の文化が英語で論じられて初めて、明確に理解できる、ということをしげしげ経験する。日本文学を英訳で読んだときも同様である。日本語のニュアンスが失われ、がっかりするときもあるが、しかし、別の言語に移されることにより内容がよりわかりやすくなり、理解が深まるということも多々ある。以下は、「英語でよむ万葉集」（リービ、2004）を評して青木昌彦氏が述べたことばである。（2005）

「…古文解読の受験勉強に浸っていると、「草枕」という旅の枕詞は、無味乾燥な約束事としかみえないでもない。だが、無名の旅人の屍を見て詠まれた柿本人麻呂の悲歌「草枕 旅の宿りに 誰（た）が夫（つま）か」が、Whose husband here/sought shelter on his journey./grass for pillowと訳されたのを読むと、古代の旅の厳しさと逞しさの真実が迫ってくる。

英語を表現のことばとして制度の比較を仕事としてきた評者は、ことばの越境の自在に魅せられ、古代日本のおおらかなイメージも膨らんで……。」

視点を再度、カナダの大学に戻そう。北米においては、日本研究といえども英語を媒介言語にすることが必然的で免れないことであるなら、では、その結果生じる難点を補うという方向で進めばよいのではないか。日本語教育との提携も、そこで大事な要因となってくるのではないか。これを体系的に論じることが、しかし筆者の力では及ばない。次の項に、主要な難点のひとつであるが、比較的容易に解決できると思われる事項につき述べたい。

## 5.2 固有名詞、用語のローマ字表記

人文科学、社会科学いずれの分野においても、英訳テキスト、英語文献を主教材とした際に、もっとも大きな問題のひとつとなるのは、非常に単純なことではあるが、固有名詞（人名、地名など）および翻訳できない日本語のキーワード、キイコンセプトをすべてローマ字表記で学ばなければならないことである。例えば歴史で「参勤交代」「士農工商」「大政奉還」は **Sankinkotai**、**Shinokosho**、**Taisehokan** となり、多くの学生にとって（特に語彙、漢字力が低い学生にとっては手掛かりがないから）これらは単なる「意味のない文字列」であり、試験の際には丸暗記を余儀なくされる。学生のみでなく、教授にとってもローマ字表記の日本語はまことに扱い難く、スペル・ミスも頻繁に生じる。（実際に歴史の試験問題を参照したところ、スペル・ミスはいくつもあった。）

さて、ではどうすればよいのか。日本語ネイティブにとっては言うまでもないが、ノン・ネイティブにとっても、上記のような用語がローマ字でなく一步進んでひらがな表記になっても、依然認知しにくい文字列である。漢字表記となって初めて意味のある語として認知され、内容も効率よく理解されるようになるであろう。表意文字である漢字の力は大きい。そこで、文章の読解力はさておき、日本研究の講座においては、できる限り漢字表記を含めたグロサリを学生に提供してはどうか。それにより、英語文献を使う際の問題の一部が解消できるのではないか。またさらに、日本語能力の高い学生の場合はグロサリを自習できるが、できない学生が多い講座の場合は日本語コースとペアとなり、このグロサリの履修をカリキュラムに含めてもらう。日本語コースにとっては、部分的なコンテンツ・ベースの授業ということになる。理想的には、ペアとなった日本語講座を日本研究講座の前提科目とすれば学生の下準備も均一化されることになるが、その設定が難しければ「前提科目として **Recommended** もしくはグロサリを自習」としてはどうか。実際に、体系だったシステムにはなっ

いなくても、日本語表記のグロサリを用意するという方法をとっている歴史、地理などの講座はすでに存在する。

漢字表記の用語に加え、日本文化論、日本事情を主題にした講座では、和製英語、略語など元がカタカナ表記、または漢字とカタカナの組み合わせ表記の語が多数テキストに含まれている。これらもまた、ローマ字では読みにくい。読みにくいばかりでなく、Keitai、konbini、risutora、jideji は、「ケータイ」「コンビニ」「リストラ」「地デジ」となって初めて日本事情が反映され、日本人の言葉使いの巧みさ、その語への意味づけが理解される。「携帯電話」がどうして「ケータイ」になったのか、その背景を学んでこそ、日本文化のユニークさがわかってくる。カタカナは漢字より扱うのが容易であるから、是非これらも日本語表記のグロサリにして教材に含めてはどうか。

### 5.3 日本語の中の外国語

最後にもう一点、使用テキストを調査している過程で、興味深い問題に気づいたので、付記したい。文学に関することであるが、これは問題というよりも、英訳テキストを使った場合、どう教えるかを探求する課題のひとつといえるかもしれない。小説などで日本語の原典に英語、フランス語などの外国語が混ざって使われ、その存在が原典では特別意味のある要素、時にはスパイスとなっていることがある。これらはしかし、ひとたび翻訳テキストとなると浮き立つ要素がなくなり面白みが消えてしまうことが多い。

現代文学には特にそうした例が多数あるが、例えば、島田雅彦の「夢使いーレンタルチャイルドの新一都物語」(1989)。ニューヨークを舞台にコミカルに描かれたストーリーで、その中に日本語と英語の会話が混ざって出てくる。英訳版ではしかし、すべて英語となり、日英対比の妙味は埋没してしまう。

また、もう一つの例を挙げると、金井美恵子の「タマヤ」という小説の中で(1999)「ウエマシャ？」というフランス語が出てくる。アレクサンドルと称する日本人の登場人物が友人に無理やりネコを預け、あとで友人を訪ねた際にこのフランス語のせりふを言う。つまり「自分のネコはどこか」と聞くのであるが、友人はそれを聞いて「マシャというならタマをつれていってくれよな」とやり返す、という場面である。この小説は翻訳版がまだ全く出ていないので、これからの課題であるが、比較文学者の小谷野敦氏(2008)はこれについて、英訳してフランス語で書いてもおもしろくないし、仏語訳であつたらますます意味をなさなくなる、と指摘している。日本人が使ったフランス語を簡潔なカタカナ書きにしているところ、そして、このいわば借りたことばで二人が掛け合いをしているところが、この一節の面白みであると思うが、それをどのように学生に伝えることができるか、興味深い。前述の「ローマ字表記」にも関連

するが、ここはやはりどうしても視覚に訴えるカタカナ書きで見る必要があるのであろうか。

4.1で、「掛詞」が英訳の中で鮮明になる、ということに触れたが、「日本語の中の英語」が英訳となったときは、どうすれば原典にある元の価値を伝えることができるのであろう。ますます翻訳版が増えていく中、学生に日本文学をどう教えるかということのみでなく、もっと基本的な、文学作品をどう翻訳したらよいかという観点からも興味深い課題である。

## 6. おわりに

カナダの大学の日本研究における媒介言語について調査をし、考察を行った。「はじめに」でも述べたとおり、筆者自身は、東アジア研究学部のない小規模大学で日本語教育に関り、直接には日本研究の分野で仕事をしていない。いわば門外漢である。しかし、小規模ながら、筆者の大学にも日本研究マイナー・プログラム（副専攻プログラム）の一部として、日本史、日本地理の講座があり、それを教える同僚達と常々、媒介言語の問題について話している。日本語を教える側にとっても、これは注目すべき課題であり、日本語教育の目的にも関わってくるので、本小論で取り上げた次第である。パネル・ディスカッションでは、日本研究を専門とされる諸先生方に、ご意見をいただければ幸いである。また、ここで論じたのは、北米にあるカナダの現状である。中国、韓国など、日本語学習者の数がカナダとは桁外れに多いアジア諸国における状況は、おそらく様相を異にするであろう。この点についても是非、教えを乞いたい。

## 参考文献

- 青木昌彦（2005）「書評—英語でよむ万葉集 [著] リービ英雄」『朝日新聞』  
2005年1月16日.
- 小谷野敦 <<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%be%ae%c3%ab%cc%ee%c6%d8>>  
（2008）「金井美恵子先生を読む榊敦子先生」『猫を償うに猫をもってせよ』  
<http://d.hatena.ne.jp/jun-jun1965/20081111>（2009/5/30アクセス）
- 金井美恵子（1999）『タマヤ』． 河出書房新社
- 島田雅彦（1989）「夢使い—レンタルチャイルドの初二都物語」講談社
- 富山一郎（2009）「日本研究の現在—共同作業としての日本研究」  
<http://ishibashi.hippy.jp/bunkahihyo/tomiyama.htm>

(2009/6/8アクセス)

リービ英雄 (2004) 「英語でよむ万葉集」 岩波書店